



市立病院だより  
ほほえみ

発行 越谷市立病院  
 発行人 院長 丸木 親  
 編集 院内情報誌編集委員会  
 連絡先 〒343-8577  
 越谷市東越谷10-47-1  
 電話 048-965-2221 (代)  
 F A X 048-965-3019  
 発行日 平成30年10月 (No.37)

## 脳梗塞の治療とSSN（埼玉脳梗塞ネットワーク）について

脳神経外科部長

つのだ あきら  
角田 朗

近年の医療技術の進歩はめざましいものがあり、現在では過去には考えられなかったような治療が次々に現実のものとなつていきます。

脳梗塞治療の分野でも、血栓溶解（t-PA）療法や、血栓回収療法といった、画期的な治療法がほぼ確立しつつあります。ここでは、脳梗塞という病気と、最新の治療について簡単に説明した後、その治療を効果的に行うためのシステム「埼玉脳梗塞ネットワーク（SSN）」についてお話ししたいと思います。

脳梗塞は、脳の血管（主に静脈）が血栓によって閉塞し、その血管に栄養されてい

た脳組織が死んでしまう病気です。脳組織は、手足を動かしたり、言葉をしゃべったりする機能の元ですから、脳梗塞が生じるとその領域に依じて片麻痺や言語障害などの症状が出ます。また、中枢神経の組織は抹消の組織と違ってほとんど再生しないので（今後、再生医療の進歩は大いに期待されますが、現時点ではまだ実用的なものはありません。）、症状は後遺症としてずっと残存することが多くなります。

脳梗塞が完成してしまえば根本的な治療はなく、急性期には被害を最小限にとどめつつ、回復期にリハビリテーションを行い、その後再発予防をすることになります。しかしながら、血管が閉塞してから脳梗塞が完成するまでには、若干の時間差（数時間程度）があります。その間に、血栓を溶かして血管の血流を再開することにより、脳組織のダメージを最小限にし、すでに出現している症状を回復させることができる治療が、血栓溶解療法と血栓回収療法になります。前者はt-PAという血栓溶解薬を静脈から投与するもの、後者は動脈に直接カテーテルを入れ、血栓回収する治療（血管内手術）となります。

いずれの治療も従来の治療にはない劇的な効果が期待できる場合が多いです。それなりのリスクも伴うので、その判断ができ、かつ治療もできる医療施設で治療を受けなくてはなりません。

また、少なくとも数時間以内には治療を開始しないと意味がないので、最初に治療可能な施設に搬送されることが必要です。

そのために、埼玉県では、SSN（埼玉脳梗塞ネットワーク）という仕組みが実施されています。これは、救急隊が血栓溶解・回収療法の適応があると判断した患者さんを、直接治療可能な直近の病院に搬送するシステムです。皆さんが、万が一脳梗塞になったときどうすればいいのでしょうか？脳梗塞の詳しい症状や、血栓溶解療法の難しい適応を憶えたいうえで病院に電話する必要があるかもしれません。「脳梗塞かな？」と思ったら、まずは救急車を呼んでください。

そこからスムーズに患者さまの搬送・治療が行われるシステムが、幸いにして埼玉県にはあるのです。



## 脳梗塞になった時の対応について

6・2病棟 副看護師長

菊子 直美

最初に脳梗塞の症状をよく知っておきましょう。

突然の片側の手足や顔の麻痺・しびれ・力が入らない・フラフラしてまっすぐに歩けない・呂律が回らない・言葉がでない、理解ができない等があります。

その他、物が二重に見える・視野が欠ける・めまいやふらつき等の症状が出る事もあります。脳梗塞を強く疑うべき症状は、顔の麻痺（Face）、腕の麻痺（Arm）、言葉の障害（Speech）で、この症状が出たら時間（Time）を確認し一刻も早く受診をしましょう。これは「FAST」と言っています。

では、このような症状が出たら、どう対応すれば良いのでしょうか？

症状は突然現れることが多いので、症状に気づいたら、すぐに専門の医療機関を受診しましょう。救急車を呼んで、脳梗塞急性期の治療ができる医療機関に診てもらいましょう。なぜなら、脳梗塞の治療の中には早期にしか行えない治療があるからです。軽症だからと言って様子を見ているうちに、症状が悪くなる危険もあります。症状が現れた時間を確認し、救急車が来るまで安静にして待ちましょう。また自分では症状に気づかず、家族や周囲の人が気づく場合もあります。

家族や周囲の人の脳梗塞の症状に気づいたら、救急車を呼び、専門の医療機関の受診をすすめましょう。

### 〈脳梗塞を起こさないための予防〉

脳梗塞の原因は、高血圧・脂質異常・糖尿病・心疾患（不整脈）・生活習慣などが上げられます。そのため、これらの病気にかかっている方は、治療を受け、危険因子を減らしましょう。病気にかかっていない方も定期的に健康診断を受け、危険因子を減らしましょう。肥満や喫煙・多量飲酒には注意し、減塩を心がけバランスの良い食事にし、減塩を心がけバランスの良い食事をしましょう。また高齢者には脱水になりやすく、血液の流れが悪くなる要因となり、脳梗塞を起こしやすいう状況を招くこともあります。夏の多汗・下痢・発熱時には、水分を摂取して脱水を予防することも大切です。

最後に脳梗塞を疑わせる症状が出たら、一時的なものや軽症であっても、自己判断せず、専門の医療機関にかかりましょう。早期の発見・早期の治療で後遺症が軽く済む事もあります。



## 脳卒中のリハビリテーションについて

リハビリテーション科 技師長

栗原 密

脳卒中で入院された場合、当院では、ほぼ全員入院当日にリハビリテーションの指示が出ます。脳卒中の症状に対する治療と、入院することで起きやすい体力低下などを予防することが目的です。まずは主治医に方針を確認し、血圧や意識レベル、手足の麻痺や言語障害など、どのような症状が出ているのか、またその症状が進行していないかなどを評価します。そして、麻痺が出て、動きにくくなった手足の運動をはじめ、会話が難しくなった方には言語訓練、食事を摂ることが難しくなった方には摂食嚥下訓練、高次脳機能障害という認識の障害が出た場合には認識を促すような訓練が必要となります。さらに、不必要な安静をとらず、早期から坐る・立つ・歩くという活動も重要なリハビリテーションの項目の一つなので、病棟看護師と連携をして行動範囲の拡大を進めています。

脳卒中の症状や重症度は人によって様々で、後遺症によっては自宅退院や職場復帰がすぐできない場合があります。当院は脳神経外科の治療が中心の急性期病院なので、入院可能な日数が短く、リハビリスタッフの数も限られています。リハビリテーションに時間をかける必要がある方には、ケースワーカーと相談をして、近隣のリハビリテーション病院への紹介をします。

脳梗塞慢性期の薬物療法（再発防止）

薬剤科 副科長

木村 美由喜

・慢性期の薬物療法は脳梗塞の再発を防ぐための治療です！  
 ・血栓を予防する薬（抗血栓薬）は飲み続ける必要があります！



○心原性脳塞栓症・心臓の病気（不整脈など）が原因となり、心臓の中にできた血液の塊が脳に運ばれ脳血管を閉塞させた状態。  
 その場合、凝固を抑える治療が適応となります。

・抗凝固薬・ワーファリン錠、リクシアナ錠 エリキユース錠など。  
 ○非心原性脳梗塞症・高血圧症、糖尿病、脂質代謝異常などのために動脈硬化を起し脳血管が狭くなることよって、脳への血液供給が足りなくなった状態。  
 その場合、血小板の働きを抑える治療が適応となります。  
 ・抗血小板薬・アスピリン、クロピドグレル錠、シロスタゾール錠など。

〈日常生活の注意点〉

＊自己判断で服用中止・減量をしないでください。（再発しやすくなります！）  
 ＊飲み忘れた場合、気づいた時点で1回分飲んでください。絶対に2回分まとめて飲まないでください。ただし、次の服用時間が近い場合は、薬によって対応が異なります。  
 あらかじめ確認しておきましょう。ご不明な点は医師・薬剤師へお問合せください。

＊通常より出血しやすい状態です。  
 手術、抜歯、胃カメラの前には、休薬をするかどうかの判断が必要になります。必ず主治医に相談しましょう。  
 ＊他の薬や食品との飲み合わせに注意！  
 他科受診時は抗血栓薬を飲んでいることを必ずお伝えください。

☆認定看護師による公開講座のお知らせ☆

当院では、皮膚・排泄ケア、感染管理、手術看護、摂食嚥下障害看護、乳がん看護、緩和ケア、がん性疼痛看護、がん化学看護の8分野13名の認定看護師が活動しております。  
 平成26年度からは、越谷市民・近隣の皆様に少しでもお役に立てればと、公開講座を開催しております。

今年度は「最後まで自分らしく生きるため」と題しまして、公開講座を開催することとなりました。テーマは「健康増進のために行えること」「今から考えよう『終活』」です。市民・近隣の皆様が、自分らしく人生を過ごすために役立てて頂ける内容だと思います。超高齢社会で健康を維持するためにできること、そして誰でもいつかは迎える「最後」について、一緒に考えてみませんか？

☆公開講座 開催のご案内☆

日時：平成30年11月20日（火）  
 午後1時から午後3時

会場：越谷市立病院  
 西棟3階会議室



参加費：無料  
 申込み：不要  
 ※どなたでも参加できます。  
 ※当日会場にお越しください。



◇ 新採用医師の紹介 ◇

平成30年7月1日付

（整形外科） 殷 鐘晃

（整形外科） 金 栄智

（整形外科） 高宮 成将

（呼吸器科） 門屋 講太郎

平成30年9月1日付

（脳神経外科） 長谷川 浩

編集後記

今年の夏は、例年になく酷暑であり、お身体に障られた方も多かったのではないのでしょうか。季節はすっかり秋となりました。過ごしやすいつき、食欲の秋です。食事をしっかりと摂り、健康な毎日を過ごしていきましょう。

院内情報誌編纂委員長 尾羽澤 英子